

花咲かじじい

楠山正雄

青空文庫

むかし、むかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがありました。

正直しょうじきな、人のいいおじいさんとおばあさんどうでしたけれど、子どもがないので、飼かいいぬ犬いぬの白しろを、ほんとうの子どものようにかわいがっていました。白も、おじいさんとおばあさんに、それはよくなっていました。

すると、おとなりにも、おじいさんとおばあさんがありました。このほうは、いけない、欲よくばりのおじいさんとおばあさんでした。ですから、おとなりの白をにくらしがって、きたならしがって、いつもいじのわるいことばかりしていました。

ある日、正直おじいさんが、いつものようにくわをかついで、畑をほりかえていますと、白も一いっしょ緒しょについてきて、そこらをくんくんかぎまわっていました。ふと、おじいさんのすそをくわえて、畑のすみの、大きなえのきの木の下までつれて行って、前足で土をかき立てながら、

「ここほれ、ワン、ワン。」

「ここほれ、ワン、ワン」

となきました。

「なんだな、なんだな」

と、おじいさんはいいながら、くわを入れてみますと、かちりと音がして、穴のそこできらきら光るものがありました。ずんずんほつて行くと、小判こばんがたくさん、出てきました。おじいさんはびつくりして、大きな声でおばあさんをよびたてて、えんやら、えんやら、小判をうちのなかへはこび込みました。

正直しょうじきなおじいさんとおばあさんは、きゆうにお金持ちになりました。

二

すると、おとなりの欲よくばりおじいさんが、それをきいてたいへんうらやましがって、さつそく白しろをかりにきました。正直おじいさんは、人がいいものですから、うっかり白をかしてやりますと、欲よくばりおじいさんは、いやがる白の首くびになわをつけて、ぐんぐん、畑の

ほうへひつぱって行きました。

「おれの畑にも小判がうまつているはずだ。さあ、どこだ、どこだ」

といいながら、よけいつよくひつぱりますと、白は苦しがつて、やたらに、そこらの土をひつかきました。欲ばりおじいさんは、

「うん、ここか。しめたぞ、しめたぞ」

といいながら、ほりはじめましたが、ほつても、ほつても出てくるものは、石ころやかわらのかけらばかりでした。それでもかまわず、やたらにほって行きますと、ぷんとくさいにおいがして、きたないものが、うじやうじや、出てきました。欲ばりおじいさんは、

「くさい」とさけんで、鼻をおさえました。そうして、腹立ちまぎれに、いきなりくわをふり上げて、白のあたまから打ちおろしますと、かわいそうに、白はひと声、「きやん」とないたなり、死んでしまいました。

正直おじいさんとおばあさんは、あとでどんなにかなしがったでしょう。けれども死んでしまったものはしかたがありませんから、涙をこぼしながら、白の死骸を引きとつて、お庭のすみに穴をほつて、ていねいにうずめてやって、お墓の代りにちいさいまつの本を一本、その上にうえました。するとそのまっが、みるみるそだって行って、やがてり

つばな たいぼく 大木になりました。

「これは白の形見だ」

こうおじいさんはいつて、そのまつを切つて、うすをこしらえました。そうして、

「白は しろ おもちがすきだったから」

といつて、うすのなかにお米を入れて、おばあさんとふたりで、

「ぺんたらこつこ、ぺんたらこつこ」

と、つきはじめますと、ふしぎなことには、いくらついてもついても、あとからあとから、お米がふえて、みるみるうすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、
台所 だいどころ といつぱ
いお米になつてしまいました。

三

するとこんども、おとなりの欲 よく ばりおじいさんとおばあさんがそれを知つてうらやましがつて、またずうずうしくうすをかりにきました。人のいいおじいさんとおばあさんは、

こんどもうつかりうすをかしてやりました。

うすをかりるとさつそく、欲ばりおじいさんは、うすのなかにお米を入れて、おばあさんをあいてに、

「ぺんたらこつこ、ぺんたらこつこ」

と、つきはじめましたが、どうしてお米がわき出すどころか、こんどもぷんといやなにおいがして、なかからうじやうじや、きたないものが出てきて、うすにあふれて、そとにこぼれ出して、やがて、台所だいどころいっばい、きたないものだらけになりました。

欲ばりおじいさんは、またかんしやくをおこして、うすをたたきこわして、薪まきにしてもしてしまいました。

正直しようちきおじいさんは、うすを返してもらいに行きますと、灰になっていましたから、びつくりしました。でも、もしてしまったものはしかたがありませんから、がっかりしながら、ざるのなかに、のこった灰をかきあつめて、しおしおうちへ帰りました。

「おばあさん、白しろのまつの木が、灰になってしまったよ」

こういっておじいさんは、お庭のすみの白のお墓はかのところまで、灰をかかえて行ってまきますと、どこからか、すうすうあたたかい風が吹いてきて、ぱつと、灰をお庭いっばい

に吹きちらしました。するとどうでしょう、そこらに枯れ木のまま立っていたうめの木や、さくらの木が、灰をかぶると、みるみるそれが花になって、よそはまだ冬のさなかなのに、おじいさんのお庭ばかりは、すっかり春げしきになってしまいました。

おじいさんは、手をたたいてよろこびました。

「これはおもしろい。ついでに、いっそ、ほうぼうの木に花を咲かせてやりましょう」
そこで、おじいさんは、ぎるにのこった灰をかかえて、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」
と、おうらい往來をよんであるきました。

すると、むこうからとの殿さまが、馬にのつて、おおせいけらい家來をつれて、狩かりから帰ってききました。

殿さまは、おじいさんをよんで、

「ほう、めずらしいじじいだ。ではそのさくらの枯れ木に、花を咲かせて見せよ」といいつけました。おじいさんは、さっそくぎるをかかえて、さくらの木に上がって、

「金のさくら、さくらさくら。」

銀のさくら、さくらさくら」

といいながら、灰をつかんでふりまきますと、みるみる花が咲き出して、やがていちめん、さくらの花ざかりになりました。殿さまはびつくりして、

「これはみごとだ。これはふしぎだ」

といって、おじいさんをほめて、たくさんにごほうびをくださいました。

するとまた、おとなりの欲ばりおじいさんが、それをきいて、うらやましがって、のこつている灰をかきあつめてざるに入れて、正直おじいさんのまねをして、

「花咲かじじい、花咲かじじい、日本一の花咲かじじい、枯れ木に花を咲かせましょう」と、往來をどなつてあるきました。

するとこんども、殿さまがとおりがかつて、

「こないだの花咲かじじいがきたな。また花を咲かせて見せよ」

といいました。欲ばりおじいさんは、とくいらしい顔をしながら、灰を入れたざるをかかえて、さくらの木に上がつて、おなじように、

「金のさくら、さらさら。

銀のさくら、さらさら」

ととなえながら、やたらに灰をふりまきましたが、いつこうに花は咲きません。するうち、

どつとひどい風が吹いてきて、灰は遠慮なしに四方八方へ、ばらばら、ばらばらちつて、殿さまやご家来の目や鼻のなかへはいりました。そこでもここでも、目をこするやら、くしやみをするやら、あたまの毛をはらうやら、たいへんなさわぎになりました。殿さまはたいそうお腹立ちになつて、

「にせものの花咲かじじいにちがいない。ふとどきなやつだ」

といつて、欲ばりおじいさんを、しばらくせまいました。おじいさんは、「ごめんなさい。ごめんなさい」といいましたが、とうとうろ屋へつれて行かれました。

青空文庫情報

底本：「むかしむかしあるところに」童話屋

1996（平成8）年6月24日初版発行

1996（平成8）年7月10日第2刷発行

底本の親本：「日本童話宝玉集（上中下版）」童話春秋社

1948（昭和23）～1949（昭和24）年発行

入力：鈴木厚司

校正：林 幸雄

2001年12月19日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

花咲かじじい

楠山正雄

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>